

## 進む畜産業への利用

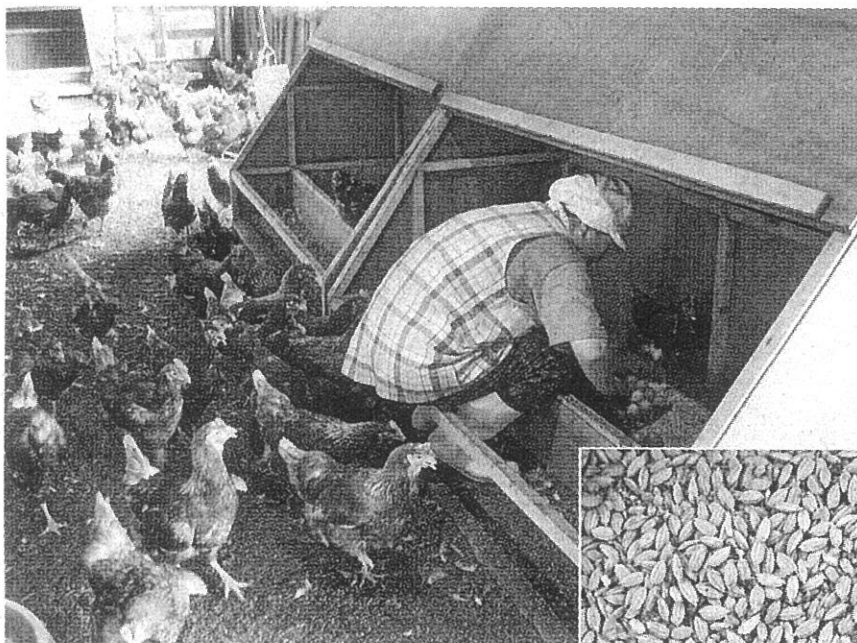
### 安定需給構築がカギ

2014 暮らし 5

#### 米づくりの未来

##### 飼料用米の行方

政府は飼料用米を新たに創設する日本型直接支払の目玉とし、今後5年間で40万トンの増産を目指している。県は県内で生産した飼料



県産の飼料用米が配合された餌を食べて育つ、常盤村養鶏農協の鶏。右下は飼料米68%が配合された飼料。これを食べた平飼いの鶏の産む卵は黄身の色が薄くなり、食味も軽やかになるという

注目が増す飼料用米だが、津軽地方ではすでに飼料用米を畜産業に利用する取り組みが進んでいる。

藤崎町の常盤村養鶏農協(トキワ養鶏、古川治代表理事)は2007年、いち早く飼料用米を導入した。

最も高級な平飼いの鶏の餌に、県産飼料用米が68%配合された飼料を与えるなど、グループ約38万5000羽

の飼料にコメを取り入れ、年間7500ト(12年)の鶏卵を生産している。

「取引先の半分近くは、食の安全に厳しい生協関係。旧常盤村が『有機の里』を掲げていたという地域性もある」と説明。飼料の違

いから、卵黄の色が淡くなる点を逆手に取り「レモンイエロー」をシンボルカラーとしPRも行っている。

トキワ養鶏と飼料用米取引を始め4年目という、みよし野農園(五所川原市鶴ヶ岡)の渡邊洋一さん(50)は、8年前から飼料用米を生産し「北東北、特に青森は飼料用米生産の適地。暑さによる病害虫がほとんど発生しないので、農薬散布の回数も少なく済む。残留農薬という要素を考えると、飼料用米の生産基地になり得る」と語る。

日本の畜産農家が輸入飼料ではなく国産の飼料を使い、国内の農家で利益を回すべきだ

。つがる市で年間約3万トンの豚肉を生産・出荷している「木村牧場」では12年から、餌に県産中心の飼料用米を使っている。木村洋文社長は「飼料用米の入手量が増えるなら、子豚の頃からもっと餌に配合したい」と意欲を燃やす。

飼料用米は流通ルートの整備が不十分なため、木村牧場は広告や津軽地域の市町村の広報で販売を呼び掛けている。飼料用米を配合する独自の設備も12年から稼働。生産者と畜産農家の安定的な需給関係がさらなる消費拡大の力ギになりそうだ。

一方で、生産者目線で見ると、すでに飼料用米の種もみには生産者の注文が殺到しているほか、10ヶ当たり最高10万5000円の補助金を得るためには津軽地方では800ヶ近い単収(10ヶ当たりの収量)が求められ不透明な部分が多い。渡邊さんも「品種や栽培方法の工夫で多収を実

現しないと手取りが下がる」と心配する。生産者にとってまず

は収量を増やすことが喫緊の課題だが、かといって飼料用米の供給

が急増した場合、今度は受け入れ側に問題が生じる。

トキワ養鶏の浜谷参与は「13年は約4000トを仕入れた。1年間で無理なく使い切れる量は、最大6000トまでと見越すが、飼育数を一気に増やせるわけではないので、あまり急に飼料用米の供給量が増えても対応は難しい」と説明する。

生産、流通、販売とさまざまな課題を有する飼料用米への生産誘導。ただ、木村社長はこう語る。「コメという素晴らしい穀物を飼料にできるのは、コメを作り続けてきた日本だけ。津軽は日本の『穀倉地帯』として未来に向かうべきだ」

(山内俊一、渋谷絃一、下山和枝)